

子どもたちと共に歩む

成人してから教会に導かれた私にとって、教会学校は遠い存在でした。しかし、二人の娘が与えられたことで、信仰の継承について考えるようになりました。漠然と娘たちを教会で育てたいと願っていた私に神さまは道を備えて下さり、2002年から、川口基督教会「子どもの集い（教会学校）」のスタッフとして活動しています。

「子どもの集い」の活動の中で、共に教会で子育てする仲間たちを得て、悩みや喜びを分かち合いながら歩んでこられたことは大きな恵みだと感じています。その仲間の一人である齋藤みちさん（日本聖公会 石橋聖トマス教会信徒）が2009年夏に「京都・大阪教区合同教会奉仕者のための黙想会」で信仰の継承に関してお話されるにあたり、まとめた文章をご紹介します。

齋藤さんの提言を新しい考えだと感じる方がおられるかもしれませんが、彼女の「私が子どもたちに伝えなければならないことは、聖餐式（礼拝）ただひとつ」という言葉に、私はクリスチャンとして忘れてはならない姿勢を感じます。私自身も、そうありたいと心から思います。

【Yumikoのひとりごと】

何度もミーティングを繰り返して、齋藤さんの子どもたちへの熱い思いをまとめるお手伝いをさせてもらいました。そのことで私自身の考えもまとまったような気がします。是非多くの方に読んでもらいたいと思い、HPにアップさせていただきました。原文のままをご紹介します。

天のお父さま これが私たちの子どもです

齋藤みち

おはようございます。大阪教区の齋藤みちです。私は、子どものとき石橋聖トマス教会で育ちました。結婚して川口キリスト教会に移りましたが、今年（2009年）の1月から、また石橋聖トマス教会に行くことになりましたので、今は、トマス教会の信徒です。今日は、このようにして皆さんと分かち合えることを感謝します。

はじめに、今回山野上司祭から、黙想会で「私の子育ての考え方を伝えるように」とプログラムを与えられました。私は、結婚するまで保育士として働きました。今、小学4年生と、5年生の子どもがいます。私は今までの大部分を「子ども」との関わりの中で生きてきました。けれども、自分の考えがまとまっていたわけではありません。今回の黙想会のために、今まで一緒に子ども達に関わってきた、川口教会のスタッフとミーティングを持ちました。このプログラムのために、私たちスタッフが学びの機会を与えられたことを感謝します。

何度もミーティングで話し合っているうちに、私が子どもたちに信仰を伝える方法として、大切にしたいと思っていること、そして、大切にしてきたことが見えてきました。それ

は、聖餐式と一緒にささげることです。これは、言い方を変えると「私が子どもたちに伝えなければならないことは、聖餐式ただひとつ」ということです。

どうしてこのような考え方になってきたのか、また、実際子ども達と聖餐式をささげていて感じたことをミーティングで分かち合ってきました。

そこで、今日は、「天のお父さま、これが私たちの子どもです」というテーマでお話させていただきたいと思います。一緒にミーティングをしてくれた人たちは、川口教会で子どもの集いのスタッフであり、また、大阪教区のキッズフェスティバルのスタッフでもあります。

私は、「大阪教区キッズフェスティバル」の企画に スタッフとして5年間参加させていただきました。これは、大阪教区宣教部、生涯学習委員会の取り組みで、大阪教区の子ども向けプログラムです。キッズフェスティバルのことも含めて、報告するようにと

山野上司祭から課題を与えられておりますので、今日はスタッフの代表としてキッズフェスティバルのことも、毎主日、私たちが子ども達に関わって学んできたことを発表させて頂きたいと思います。

子どもたちに神さまのことを伝える

はじめに、私たちキッズフェスティバルのスタッフは、ひとつの思いを持ってキッズフェスティバルを企画して来ました。それは、子どもたちに神さまのことを伝えるということです。これは、大人として、教会の信徒として、また、教会学校のスタッフとして、私だけでなく、ここにいる人たちが持っている思いだと思います。キッズフェスティバルという行事を何度か経験したことにより、わたしたちは、神さまのことを伝える方法にも、方向性を持つようになりました。それは、子どもと大人が共に礼拝をささげる、ということです。キッズフェスティバルは、「教区子ども礼拝」という目的を持てるようになってきました。

キッズフェスティバル

では、わたしたちが実際に 子どもたちの持っている力を感じたキッズフェスティバルを少しご紹介したいと思います。今回は、2006年、2008年、そして、今年の4月に行なわれたものをまとめてみました。DVDに編集しましたので、少しごらん頂きたいと思います。では、お願いします。 〈キッズDVD上映〉

ありがとうございました。今回のDVDは、総集編のようにしてみました。なんとなく、キッズフェスティバルの雰囲気がお分かりいただけたのではないのでしょうか？キッズフェスティバルは、2004年に企画された大阪教区の教師交流会から始まりました。これは、各教会の教会学校スタッフが集まって、現状を報告し合い、ほかの教会学校のアイデアを得ようとする目的を持っていました。このころ教師交流会では、教区の子ども行事を考えると内容が話し合われていました。そして、色々な意見が出ました。子どもだから、体を動

かしたほうがいいのか？子どもは楽しいほうが 喜ぶのではないか？遠足、運動会、ゲーム大会…様々な案が出ました。けれども、私たちは、教会の中で子育てをしています。子どもを参加させる親の立場として、このような企画は、地域の子ども会や、学校の行事で満足しています。また、そのような行事のプロフェッショナルが企画したものは、ほんとに楽しいものです。けれども私たちは、教会の中で企画をします。これがなぜか、中途半端に企画されてしまうのです。なぜでしょうか？

行事と神さまを無理矢理つなげようとしていたのです。参加した子どもたちはまた、教会に来ようと思うのでしょうか？参加した子どもたちが、神さまを信じようと思うのでしょうか？教会に与えられた役割は一体何だろうと、考えました。

教会だからこそ、教会の人が企画したからこそ、というものはないか、と考えたのです。私たちがずっと行なってきたものは、礼拝ではないでしょうか？教会とは、礼拝するところではないでしょうか？そこで、キッズフェスティバルは、「教区子ども礼拝」という目的を持ったのです。

そのころ、礼拝に対するスタッフの思いは「礼拝では、子どもは集まらないだろう」「礼拝では、子どもは退屈するのではないか？」といったものでした。「子どもが楽しい礼拝」になるように、という気持ちで話し合いが始まったと思います。子どもたちが楽しめるような、子どもが喜ぶような、そんな礼拝を考えようとしていました。模索する中で、数回のキッズフェスティバルを経験しました。新しいスタッフが加えられていきました。ミーティングを重ねるたびに、少しずつ壁にぶつかるようになりました。

礼拝って楽しいもの？

礼拝って、楽しいものなのだろうか？このことが、どのミーティングでも話題になりました。答えが見つからないまま、行事を企画するときもありました。しかし、スタッフが共に祈り、ミーティングを続け、何度かキッズフェスティバルを経験する中で私たちは変えられていきました。スタッフである、私たち大人は、子どもたちが礼拝する力を持っていることに気付いたのです。キッズフェスティバルでは、子どもたちが 神さまから与えられている本当に素晴らしい力を実感することができました。生まれたばかりの赤ちゃんは、笑顔で神さまの福音を伝えています。乳幼児は、言葉も何も理解できないとおもわれがちですが、素晴らしい感性で神さまを感じる事ができるのです。

イエスさまが「**子どものようにならなければ、決して天の国にはいることはできない。**

(マタイ 18 : 3)、「**子どもたちを来させなさい。私のところに来るのを妨げてはならない。**」(マタイ 19 : 14)と言われていることをわたしたちは知っているはずですが。それなのに、自分たちの都合にあわせて、子どもの力を決め付けていたのです。子どもを礼拝から遠ざけていたのは、間違いなくわたしたち大人であると感じています。

子どもは大人と違います。子どもたちは思ったことをそのまま言葉にしますし、子どもに

は疑いがありません。子どもは喜んで神さまを信じます。イエス様と一緒にいたいと思っています。

子どもの心は礼拝する力を十分に持っている

そしてそれは、子どもの心が礼拝する力を十分に持っていることを意味します。教会には、子どもたちが絶対に必要です。子どもたちの姿は、イエス様の教えをわたしたちに気づかせてくれるからです。私たちは、スタッフとして子どもたちの近くで賛美する機会が多く与えられます。子どもたちの賛美には、大きな力があります。そこで、私たちは子どもたちの賛美に力づけられるのです。「また来年会おうね!」と、帰っていく子どもたちの笑顔に写真で見た子どもたちの笑顔に、いつも神さまの愛を感じます。これは、礼拝堂にいる人たちが大人も子どもも関係なく、一緒になって、心を合わせたときだったのです。私たちは「礼拝している」ということを感じる事ができたのです。私たち大人は、「神さまのことを伝えたい」と思っていました、本当は、子どもたちから神さまのことを伝えられていたのだと思います。

キッズフェスティバルは、「子どもたちと共に、生き生きとした礼拝をする」という大きなビジョンが持てるようになってきました。キッズフェスティバルでの礼拝は、子どもだけが礼拝していても、大人だけが礼拝していても体験できなかった大きな恵みと感動があふれていました。

けれども、スタッフや参加者がキッズフェスティバルで味わったものを各教会に持ち帰って、すぐにかすことはやはり困難です。「子どもたちと共に、いきいきした礼拝をする」という状況が、それぞれの教会で整っているとはいえないからです。

どうして、子どもと一緒に礼拝することが難しいのでしょうか？このことについて、今回のミーティングで少し現状を考えてみました。

子どもの礼拝と大人の礼拝

1950年ごろには、教会学校に子どもがたくさん集まっていました。この時代から現代に至るまで、ごく一般的に教会には教会学校がありました。教会学校では、礼拝があり、分級がありました。この「礼拝」とは、教会学校独自の礼拝です。もちろん、聖餐式ではありません。そして、聖餐式のことを「大人の礼拝」、教会学校の朝の礼拝を、「子どもの礼拝」と呼んでいました。聖餐式が始まる前の時間や、聖餐式と並行して行っていた教会もあると思います。この礼拝は、教会学校にとって外せないものではありませんでしたが、教会学校の教師たちがエネルギーを注いでいたのは毎週の分級でした。聖餐式が始まって、大人たちが礼拝している間は、どのように過ごすかということを考えるのです。

教会学校の教師と呼ばれる人たちは、クラスごとに分かれて子どもたちと聖書の勉強を

少しした後、散歩やおやつ、ゲームなどさまざまなアイデアで子どもたちが退屈しないように考えました。聖餐に与らずに、子ども係を勤めていたこともあったのではないのでしょうか。「子どもの礼拝」に関しては、誰がお話をするか？何番の賛美歌をうたうか？今日の献金当番はだれがするか？誰が聖書を読むのか？などということが礼拝内容として話し合われていました。つまり、聖餐式や、教会暦とはあまり関連がありませんでした。

さらに、聖餐式の間、親子で礼拝に出席している人たちには「幼児の部屋」というものがありました。乳幼児をそだてている親は、礼拝中そこにいるのです。聖餐式をしている間、子どもはその部屋のおもちゃで遊びます。長い間の習慣で大人は「礼拝の時間は、子どもが退屈する時間だ」「説教は子どもには理解できないものだ」と思っていました。そして、静かにしている子どもが良い子で、騒がしい子どもは悪い子と見ていました。礼拝中は、子どもを静かにさせるために、何かおもちゃを与えるもの。静かにできない子どもは礼拝中、ほかの部屋で遊ばせておくものと信じていました。つまり、大人にとっても子どもにとってもこの形が最も良いと考えられていたのではないのでしょうか。

私の過ごした教会学校

私は、このやり方で子ども時代をすごしました。けれども、わたしが教会学校にいたころには、すでに子どもの人数は少なく、塾や、習い事を優先させている親がほとんどでした。時間があいていれば教会に行きましょう、あの子が教会に来られるのは暇だからだろう、と思っていた友達もいたぐらいでした。高学年の子どもたちは教会に来なくなるという現状は、当たり前のことと思われていました。私は社会人になり、就職し、教会で教会学校教師としての奉仕が与えられました。そして、子どもの礼拝と、分級、という形に疑問を感じ始めました。

はじめて自分自身が、聖餐式との向き合い方を考えるようになりました。私は、子どもをほっておいて、自分が聖餐式に与るか、子どもの面倒を見て、聖餐に与らないか・・・迷いながら過ごしたことを覚えています。

子どもが聖餐式に参加する

この頃、私が在籍していた石橋聖トマス教会では、教会学校だけの礼拝を止めて、大人の礼拝と一緒に参加する、つまり、聖餐式に子どもが参加することになりました。1994年11月のことです。それまでの数年、教会学校の教師が色々な研修に参加して、そこで得たものを教師会で話し合い、司祭から指導を受けました。

私たちは、「子どもの信仰」ということについて何度も何度も教師会を持ち、共に祈り、学びのときを与えられていました。子どもが聖餐式に参加することについて、また、教会学校の礼拝を止めることについて、信徒との話し合いも持たれ、賛成、反対、色々な意見が出

ました。

1995年の2月からは、月に一度、聖餐式の説教の時間を教会学校の教師が担当して、その日の福音を子ども達に伝える為の時間となりました。教師会の内容も、それまでのような行事の段取りなどの話し合いだけでなく、福音や、みことばを学ぶ時間となりました。前向きな姿勢での取り組みと共に、信徒の理解と協力を得ていきました。石橋聖トマス教会では、それに伴って、子どもたちへの取り組みや内容から、学校・先生という呼び名も変えることになりました。1999年には「子どもの集いJOY」として誕生し、現在を歩んでいます。

こうして、教会学校が大きな変化にあるときに、私は夫と、新しい家庭を築く事を与えられました。私は夫の在籍する、川口基督教会へ転籍しました。私自身に子どもが与えられ、高齢化の教会の中で、自分たちの子育てが始まりました。

私は、初めて「親」として、自分の子どもたちに、神さまを伝えるとき、自分が礼拝というものをどう考えて、聖餐式とどのように向き合っていけば良いのか？と考えるようになりました。そして、共に子育てをする仲間が与えられました。子どもたちに神さまのことを伝えるためにどうしたらいいか、色々な話しをしました。

川口基督教会では、「子どもとともにささげる聖餐式」の式文が司祭の指導のもとで毎月第4週目に、使用されるようになりました。この式文は、もともとトマス教会で作成されたものを参考に何度か改訂されて、現在使用しているものです。

【Yumikoのひとりごと】

川口基督教会では、2002年に従来の教会学校の形から現在の「子どもの集い」へと変わりました。もちろん現在に至るまで小さな子どもたちも一緒に聖餐式を守っています。斎藤さんと私は、この「子どもの集い」のスタッフとして共に活動する機会を与えられました。私は斎藤さんの「神さまだけをみつめるまっすぐな信仰」や「聖餐式を大切に思う真摯な姿勢」に多くを学びました。

子育て中の私が礼拝するときに思うこと

つまり、わたしは、自分が「おとな」として扱われるようになってから毎主日、子どもとともに聖餐式に参加してきたのです。子どもとともに礼拝することは、大変です。まず、自分が礼拝に集中できません。そして、礼拝できなかったことを子どものせいにして、子どもをせめます。こんなことですぐに感情的になる私には、神さまの愛を伝えられない・・・と落ち込むことも多いです。

あの説教いつ終わるの？

そのころ私は、1冊の本に出会いました。ロビー・キャッスルマンの「あの説教、いつ終

わるの？」という本です。このようなことが書かれていました。

「教会での子どもたちは、騒がしかったり、挑発的だったり、時には親にとって恥ずかしい存在にもなります。」

「私たち親にとって、四六時中じっとしていない幼児や不機嫌な小・中学生との礼拝は、なんて長く感じることでしょう！」

「親が礼拝に集中できない理由のひとつとして親自身、子ども時代に礼拝することを学んでいない、ということがあります。」

私もこのような経験がありました。とても共感できました。

【Yumiko のひとりごと】

ロビー・キャッスルマン「あの説教、いつ終わるの？」いのちのことば社

私も持っていますが、本当に魅力的な本です。しかし、今（2010年）出版社にも在庫なしで手に入らないのです。残念です。ぜひ再刷されることを祈ります。

子どもたちと礼拝を共にささげる

みなさんは、礼拝堂で子どもをみたことがありますか？子どもは、礼拝堂の中を走る、椅子の上に寝転がる、飛び跳ねる、献金をさわり、あげくには音を立てて落とす、祈祷書を破る、トイレに行きたくなると、大きな声で「おしっこ」と言ったりします。また、私たち親は子どもが騒がしくしているときに、周りの人たちから「邪魔だなあ」と、思われるのではないかといつもびくびくしていました。

さらには、「こんなに長時間、子ども達を礼拝堂に縛り付けて、かわいそうに」と言われたり、「子どもたちは、親の都合で教会に連れて来られている、がまんさせられているんだ」などなど、親である私たちが、悲しい気もちになって教会から帰ることも度々ありました。教会に来ると、親であるだけで、相当気力と体力を使い果たすのです。わたしたち親は、「そのままでいい、子どもをつれておいで」と言う一言をかけてもらえるだけでどれだけ救われることでしょう。

静かに祈りたい、説教を集中して聴きたい、と思う人がいることもわかっています。私たち親も、できればそうしたいと思っているのです。けれども、私たちは、子どもたちと礼拝を共にささげることに必死です。なぜ、そこまでしなければならぬのでしょうか。どうしてこんなことをしているのでしょうか？

私は、子育てで自分の時間が奪われていると感じ、また、そのような考え方をする自分がいやでした。さまざまなことで飢え乾いていたのだと思います。とても礼拝に出たかったです。はじめのうちは、教会にいけば、私たちがその週をなんとかやり抜くための燃料補給ができると思っていました。でも、違いました。燃料補給どころか、独身時代に自分だけが礼拝していた礼拝堂での時間を思い起こして、「いらいら」や「不満」が充満していたので

す。そんな時、先ほど紹介した、本に出会ったのでした。この本の作者は、「教会に行く」と「礼拝に行く」ことの違いについて説明してくれました。

「礼拝すること」と「静かにすること」の違い

「礼拝すること」と、「静かにすること」の違いがわからずに、子どもを育てている人が多いと書いてありました。神さまは、私たちに「霊と真理をもって」礼拝することを教えてくださいました。聖書では、どうやって神を愛し礼拝するかを教えてくださいます。私たち親子も、礼拝することを教えられる必要があるのです。

私たち親は、「礼拝すること」を学んでいませんでした。私たち大人は「教会に行くこと」や、「静かにすること」を教えられていても、礼拝することは学んでいなかったのです。

礼拝する「神さまを感じる心」

川口基督教会では、子ども時代に教会へ来ていても、青年や成人になってから教会に来ていない人が大勢いました。私の親の世代、つまり、自分の子どもが私と同じ年頃だという人たちは、私に言いました。「うちの子どもは、忙しいから教会に来れないの」「同じ世代の人たちがいないから、教会に来ても楽しくないでしょう」「もう少し、若い人がたくさんいたらうちの子も教会に来れると思うんだけど」さまざまな状況がありますし、色々な理由で教会に来たくても来られない人は大勢います。

けれども、塾やクラブなど、外部的要因という理由や、子どもは遊び相手がいなかったら教会に来てもすることがない、と言った考え方は「仕方がない事」だと思われていました。

なぜ、教会に来ないのでしょうか？なぜ、日曜日に礼拝しないのでしょうか？教会の中に、若い人たちがいなくなっているのは、今までの「教会学校」と言う形も、大きな原因のひとつではないかと考えました。私たちに「礼拝すること」を教えていなかったのです。

私たちがこれからも守っていかなければならない大切なことは、聖餐式ではないでしょうか。わたしたちが受け継がなければならなかった「聖餐式をささげる」ということを、学ばせてこなかったのです。それは、「聖餐式を感じるころ」と、「神さまを感じるころ」を育てる大切な時期に、信仰を伝えていなかったことになるのだと思いました。

【Yumikoのひとりごと】

若い世代が少ないのは、どの教会でもいえることだと感じています。しかし、聖餐式の中で育ってきた子どもたちが中高生となった川口基督教会では、クラブや勉強で忙しい中、時間をやりくりしながら教会に来て、礼拝奉仕している子どもたちが多くいます。これは勇気

づけられます。

聖餐式を感じる心

私たちは、子どもに「聖餐式をささげること」を教えよう!と考えるようになりました。「教える」というのは、「勉強させる」ということではありません。「共に感じる」ということなのです。聖餐式は、知識や、理屈よりだけでは得られない神さまの存在があります。子どもたちは「こころと体で覚える」ことが大切だとおもいます。

私たちは「心」と「身体」のすべてで神さまを感じていることを子どもに見せる必要があります。「聖餐式」を一緒に感じる事が、子どもたちに聖餐式を教える方法だと思えます。聖餐式を感じる事ができれば、聖餐がイエス様の十字架の上に成り立っていることに興味が出ます。聖餐式の中で神さまの存在を知れば、神さまの愛を感じるようになるはずですよ。

私たちの儀式は、神さまを直接伝える道なのだと、気付いたのです。私たちが「いちばん大切にしているもの」だということが伝われば、深い尊敬とあこがれを持って「自分もいつかパンとぶどう酒をもらいたい」と待ち望むようになると思います。子どもたちが幼い頃に「いつかきっとできる」と、楽しみにするように手助けするのが、私たちの役目だと思います。

私たちは子どもと一緒に聖餐式を経験しています。そして、礼拝について大切なことを学んでいます。私は、子どもにいつも言っています。「私たちは、自分の力で集まっているんじゃないからね、招かれているんだからね。自分が満足するために礼拝しているのではありません。礼拝する時は、きもちを神さまに向けましょう。献金するために集まっているのではありません。じぶんの心と、自分自身をささげることが大切なんです。」

こうやって、子どもに話しているうちに、自分も気をつけなくちゃなあ〜と思うのです。自分もできてないのに、よく子どもにえらそうにいえると、自分でも思います。私がこんなところで、みなさんに話をしていること自体、恥ずかしいことなんです。(子どもたちには、今日ここでこのような会があることは話していません。礼拝がある、などとごまかしてきたんです)

でも、礼拝のやり方を伝えなければ、子どもたちはどうやって礼拝したらよいか、わかりません。子どもは、洗濯物の干し方を何度も丁寧に、そして口だけでなく一緒にやって見せる方法で教えなければ、いつまでもくちゃくちゃに干すのです。私たち大人ができていますか、が問題なのではありません。どうすれば、子どもたちができるようになるか、が大切なのです。今回、ここで発表するためにミーティングをして私自身もそうすべきだと、改めて思うのです。

私たち大人は、子どもがいなければ成長できないのだと思います。私たちが、このように、礼拝と一緒にいることにこだわり続けてきたのは、成長していく子どもたちに、神さまを知ってほしい、愛されていることを知ってほしい。神さまを愛する人になってほしいと、願っ

ているからです。

そして、これから経験するであろう色々な試練に立ち向かうとき、必ず神さまを感じてほしいと思っているからです。そして、それは、私だけの力でできることではなくて、礼拝堂で、共に礼拝をささげるときに、神さまが私たちに与えてくださることなのだと感じるようになったのです。成長させてくださるのは、神さまなのです。

子どもたちに伝えたいもの

子どもは、親から色々なことを習います。さっきも言いましたが、洗濯のしかたや、野球のバットの振り方、お小遣いの使い方などなど。こういったことを教えるための育児書はたくさんあります。そんな育児書があるにもかかわらず、親がどうやって子どもに礼拝することを教えるか、という本はほとんどありません。

先ほど紹介したこの本には、「親が子どもに礼拝することを教えるために書きました」とありました。そこで、この本の中で紹介されていたようにまず、私たちは子どもの興味を礼拝に向けることにしました。

子どもの興味を礼拝に向ける

それは、神さまに心に向けることにつながりました。また、この本にはこのように書かれていました。

「子どもたちは、聞くことよりも実際に行動することによって多くを学びます。野球や、ピアノは参加し、練習し、忍耐することも伴って身につけていきます。子どもたちも、礼拝に参加し、経験し、忍耐することによって礼拝することを学んでいくのです。ただし、野球やピアノのように良い見本が必要です。」

子どもにとっての聖餐式は、とにかく回数をこなすことです。毎日学校へ行くのが当たり前であるように、毎週日曜日は教会で礼拝するという習慣が大切です。聖餐式の流れという感覚が体で覚えられると、司祭の動きや、祈りの意味に興味が出てきます。

私は、とにかく子どもたちを聖餐式に参加させてきました。礼拝堂で聖餐式をささげているときには、わたし自身が神さまに心に向けていることを見せようと、努力しています。礼拝堂でのおしゃべりや、マンガを読んだり、お茶を飲んだりすることは、礼拝をしていなくても、礼拝堂では避けてきました。

もし、奉仕で祭壇に上るときは、式用の靴に履き替える。そういう些細なことが、子ども達にとっては「神聖さ」を感じる手助けになりました。礼拝堂では、聖餐式をささげるお手本を示す「礼拝コーチ」になるように心がけました。まだまだ実践中ですから、失敗もあれば、成功もあります。いつも自分の思うとおりにできているわけではありません。

最近、子どもたちが、他の人を指差して「おかあさん、あの人、あんなことしている！」とうるさくいって、困っています。子どもたちは油断すると、すぐ違う方向へすすんでいくのです。子ども達に教えていかなければならないことは、次から次へと出てきます。なぜなら、子どもたちは毎日成長しているからです。この間までできなかったことが、今日ではできるようになっているのです。その度に、私も学びつづけなければなりません。毎週の日曜日が何回も繰り返しです。うまくいかなくてがっかりする時、心が怒りに満たされて自分自身さえ礼拝できなかったときもあります。けれども、いつかここにいる子どもたちと一緒に「生き生きとした聖餐式」をささげられる日が来ると信じて毎週「礼拝コーチ」にチャレンジしています。そして、子どもたちと一緒に「聖餐式」をささげたいと強く思うようになったのです。

生きている聖餐式

では、皆さんは「いきいきした聖餐式」とは何だと思われますか？「いきいきとした聖餐式」を味わったことがありますか？「生きている聖餐式」「豊かな聖餐式」「喜びあふれる聖餐式」「愛されていると感じる聖餐式」「みんなでひとつになった聖餐式」一度でもその感動を味わったことがある人はもう一度聖餐式がしたいと思うはずです。子どもたちも同じです。もういちど、みんなで聖餐式を守りたい、子どもたちがそんな風に思ってくれる日が来ることを祈ります。

そして、子どもたちが、子どもである間にそんな聖餐式を経験できるように、私たちは大人として、心から聖餐式をささげたいと思っています。

子どもたちができること

どんな小さな子どもも一緒に聖餐式をささげられると思います。もちろん、おなかの中にいるときから、祈りと賛美の声は聞こえています。子どもは礼拝できます。これは、私たちが経験した確実な答えです。

時には、子どもの声がうるさく感じられ、礼拝に集中できない状況があるかもしれません。子どもとの関係がうまくいかず、いらいらすることもあると思います。でも、子どもは私たち大人が真剣に礼拝していれば、必ずその姿を見ています。教会には、礼拝していると、かわいい子どもを抱っこしたがつたり、話しかけたりする人が必ずいます。

小さな子どもがヨチヨチと礼拝堂の中を歩くと、笑顔で相手をしてくれる人がいます。私も赤ちゃんが大好きです。すぐに抱っこしたくなるんです。でも、最近は、礼拝が終わるまでは我慢してます。子どもと礼拝堂で遊んでしまうと、子どもが礼拝できなくなります。

私は、礼拝堂ではできるだけ前の席に座るように心がけました。子どもから聖卓と、司祭と、十字架がしっかりと見えて、礼拝に集中できるようにするためです。

「ほら、パンが出てきたよ」と声をかけるだけで、子どもたちは司祭の動きに注目するのです。子どもは大人のまねをします。大人が礼拝堂の中で遊び相手になっていたら、子どもは大きくなったとき「礼拝堂では、子どもを遊んでやらなければ」と思ってしまうのです。

周りの人が礼拝している姿を見せてくれること、そして、礼拝が終わった後に、「今日一緒に礼拝ができたね」と、声をかけてくださると親子でうれしくなります。

子どもと言葉を交わし、お互いどんな人間かが、だんだんわかってくると、子どもは大人を信頼します。そして、信頼している大人が、礼拝していれば、その姿を見て共に礼拝してくれると信じています。

たとえば、聖餐式の中で、「主の祈り」だけでも、子どもの速さで唱えるなどしていただくと、私たち親子は聖餐式に参加できているという喜びや、大切に扱われていることを感じます。

子どもは大人より早く成長していきます。何でも、すすんでやりたがる小さい間に、聖餐式を手伝わせてください。(大きくなってからは、対応が難しくなってきます。何でも「え〜」とか、「めんどくさい」とかきつと言いますから。)

子どもたちが、神さまのためにお手伝いしていると思えるような仕事を任せてください。こんな小さい子は無理だ、と思うなら、大人と一緒に大丈夫です。少しずつ、礼拝の中の仕事を任せられるようになってきます。子どもは、自分に与えられた役割があると、参加していると感じるようになります。「神さまのために何ができるか」を一緒に探していくのが、私たちの信仰生活ではないでしょうか。

いつも、私たちが誰のために礼拝しているか、ということを何度もはっきりと伝えてください。聖餐式を手伝ったことを、会衆の人たちからどう見られているとか、上手にできたとか、そんな風にほめないでください。「神さまに向かってどれだけ心を込めたか」ということをわたしたち大人が決して忘れず、伝えていかなければならないのです。私が大人として気をつけていることは、大人である私たちが、子どもを利用しないということです。

神さまのために、働くことが大切、と口で言っている、私たち大人の態度ひとつで、子どもたちは、信仰を疑います。成長するにつれて、子どもたちは、私たちと同じように、迷ったり、悩んだりします。迷ったときに、この道をすすめば大丈夫だろう、と思えるような信じていてもきつと間違いないだろうと、思えるようなビジョンを見せられる大人でいたいと思っています。

今わたしは、同じ教会で子育てする親たちが与えられたことで、自信が与えられました。私たちの子どもたちが、愛する神さまを礼拝することを確かに学んでいると信じられるようになってきました。大きくなってきた子どもたちは、礼拝していてわからないことがあると、聞きあうようになってきました。聖書のみことばに触れるようになって来ました。

礼拝しているときに協力し合う姿も見られるようになって来ました。聖餐式を作り上げるときに、チームワークを感じることもあります。

子どもを連れておいで

わたしたちはこれからも、いきいきとした礼拝を求め続けて、子どもたちと共に歩きたいと思います。子どもたちの未来のために祈ってください。わたしや、ほかの親たちが礼拝堂で子育てができるように子どもたちの前でしっかりと聖餐式をささげることができるように、イエスさまが、いつも「子どもをつれておいで」と言ってくださっていることを、私たちが忘れる事のないように。そして、私たちが信仰を持って、神さまに子どもをおささげすることができるように祈ってください。

いつかその日がやってくる

いつの日か、私たちが子どもも大人も隔てなく、喜びに満ち溢れた賛美をささげることができるようになりたいと思います。今子どもである人たちが、大きくなったとき、教会を自分の家として神さまのお手伝いができるように。教会に集められた人たちを自分の家族として、愛することができるように。いつかきっと、そんな大家族として、わたしたちが神さまにつながる日が来ることを信じています。

そういう希望を持っていることをお伝えして、おわりたいと思います。